



玉縄城 まちだより

発行者：玉縄城址まちづくり会議 荒井 章 TEL&FAX 0467-45-7411
http://www48.tok2.com/home/tamanawajyo



龍寶寺山門右手の白い建物が玉縄民俗資料館



500年祭舞台整備進む
玉縄には地域活性化の重要な資源があります。その一つが玉縄の昔の暮らしを伝える民俗資料を収蔵する龍寶寺の玉縄民俗資料館と重要文化財の旧石井家住宅です。しかしこれまで市民には殆ど知られず、地図への記載すらなく、貴重な資料は埃の中に眠っていました。

協働事業協定を締結して資料館のリニューアル作業を行い、400点に及ぶ資料の整備と再展示を進めています。旧石井家住宅と併せ、新しい名称は「玉縄ふるさと館(仮称)」と改め、来春にオープンします。

と協力して子どもたちのための見学会を企画しています。また一期生は女性限定で歴史ガイド養成講座を新設し、玉縄の歴史を学び案内できるような積極的に支援していきます。

「神輿勢ぞろいと玉縄衆の武者行列」「B級グルメのような人集めはダメ」「鎌倉の玉縄、さすが玉縄と誇れる500年祭にしよう」等々20代の女性や浅尾衆院議員など幅広い会員の熱い思いが語られました。当会は、こうした会員の思いを実行委員会に引継ぎ、今後は事業担当部会としてまつりの計画実施に当ります。

玉縄ふるさと館オープンへ 重文 石井家住宅も市民が活用

玉縄の素晴らしさを再発見は市民がふるさとへの自信と愛を育み、新しいまちづくりに向かう出発点です。玉縄ふるさと館では、教育委員会

仮説が次々に提示されます。

「玉縄城址まちづくり会議」の活動

- 2010年(平成22年)
- 4/27 市長、副市長と市長要望書の城を偲ぶ広場づくりで懇談
- 4/29 鎌倉市市民提案協働事業「玉縄民俗資料館」リニューアル事業奉仕活動を開始
- 5/1 鎌倉市アダププト・プログラム七曲坂の草刈り、月例美化奉仕
- 5/6 副市長と偲ぶ広場について検討
- 5/16 七曲坂花壇クラブ 花植え
- 5/19 事務局通信初夏号を配布
- 5/21～23 かまくら市民活動の日フェスティバル参加
玉縄検定クイズ実施 90名参加
- 5/22 第6回玉縄歴史アカデミア開催「戦国の村のメンテナンス・システム(藤木久志氏)」、対談「庶民の智慧と力」藤木久志氏 VS 伊藤一美氏
- 5/24 神奈川県16市教育委員長に書簡
- 6/13 玉縄民俗資料館整備、グランマックスオリエンテリングで玉縄の歴史と自然を説明
- 7/1 市みどり課、公園海浜課が太鼓やぐら、煙硝ぐらを視察
- 7/10 推進会議にて縄張り測量中間報告と城域範囲の協議
- 7～8月 各地区夏まつりへの参加
- 7/30 玉縄学習センター郷土資料コーナー展示替え「城城南側発掘成果」
- 8/18 市道改修プラン現地説明会
- 9/19 500年祭事業部会開催
- 9/28 民俗資料館事業検討会議
- 10/19 副市長と偲ぶ広場を協議
- 10/23 太鼓やぐら草刈り
- 10/23 旧石井家住宅への電移転



七曲坂の野草「野原アザミ」
七曲坂の道端に、毎年8月から10月に掛けて咲き、まるで七曲坂の主の様だ。



昭和10年の玉縄小学校の卒業生

玉縄思い出写真館

【ひと言】
玉縄3丁目 塩田 林之助さん
私は大正12年10月生まれで、玉縄小学校の6年間は龍寶寺の校舎で学びました。
校門は北側の道路際に北向きで有り、裏門は龍寶寺前の側に有りました。校庭には2m×3m程の浅い足洗い場が有りまして、秋から春までの雨の日や雪の日には、足を洗って校舎へ出入りをしていました。(当時の学生は下駄ばきか長靴で、普段はゾリーばきでしたから)小学生は一学年一学級でしたから秋の運動会の際は手助けに、本郷、小坂・大正小学校に五年生と六年生だけが歩いて行ったり来たりしました。

- 玉縄歴史アカデミア**
- 第7回連続セミナー**
「ここまで分った!玉縄城」
縄張り測量と城域復元模型
大竹正芳氏(城郭史研究家)
古文書に見る玉縄城の最新実
伊藤一美氏(NPO法人鎌倉考古学研究所理事)
- 市長カフェ討論
「ここを知りたい!玉縄城」
松尾崇市長、伊藤一美氏他
□11月21日(日)
15:30～17:30
□玉縄学習センター3階
- 第8回連続セミナー**
□「軍記から読み解く玉縄城の暮らし」
森崎子氏(お茶の水女子大学院)
□1月29日(土)
13:30～16:30
□玉縄学習センター3階
- 玉縄城下歴史探索会**
□渡内バス停集合―慈眼寺―天嶽院―高谷砦跡―日枝神社―二伝寺―平良文公三代の塚―関谷入口バス停
□11月28日(日)
9:30～12:00解散
□参加無料、資料代300円
【協力:玉縄歴史の会】
- 女性会員・家族会員の皆さま**
七曲坂花壇クラブで花壇の手入れをしたり、七曲坂の自然から野草茶・リース・野草盆栽を作りませんか。
新年から「ふるさと館」では「玉縄歴史ガイド養成講座」も始まります。一期生は女性限定十名を募集します。
▽問い合わせはすべて企画総務 荒井まで 4517411

玉縄城址がある

三木 卓

東京下町の亀戸から大船に流入して来た。もう三十数年になる。鎌倉ロジマンの新築募集が植物園の隣りだ、ということも魅力だった。当時の大船は柏尾川の土手がまだ土だったので、春には一面菜の花が咲いていて、のどかで美しかった。歩いていくと北条という立派な標札がかかっているお屋敷に出会う。さては北条氏の末裔か。すごいな、と緊張したが、これは劇作家の北条秀司さんのお宅だった。

こどもは玉縄中学校に入学した。玉縄とは美しいイメージ。古い言葉かもしれない。しらべてみると、古代の人々が作ったきれいな飾りが出土したことに由来するものといわれ、「鎌倉観光文化検定公式テキストブック」とある。なるほど、このあたりは時間が深いのだ。

大船観音はまだ出来上る前から、東京の大学と実家の静岡市をいったり来たりするときから親しみがあつた。昭和三十年代のはじめである。そのころは中断していたころで、今のような美形になって観光客をひきつけるまでにはわからなかった。お寺は龍寶寺のお庭が好きでよくすわってぼんやりしていた。小説家は困ってしまうとそうやって才能のなさを慰めてもらいにいくのである。昔からあるものは安定していて、たよりがいがある。

玉縄城址がみなさんの心に深くかわるの、そういうことだろう。北条早雲が十六世紀にこの地に築いた。重要な拠点としてあの時代の戦略的役割を果たしたという。その遺構が今なんと清泉女学院の敷地になつているという。

「つわものどもの夢のあと」、ぼくはまだ見たことがないが、心は喚起される。大事にしらべ、守ってほしいと思う。

(小説家)

インタビュー～玉縄万華鏡～

「旧石井家住宅」(龍寶寺境内)にお住まいだった

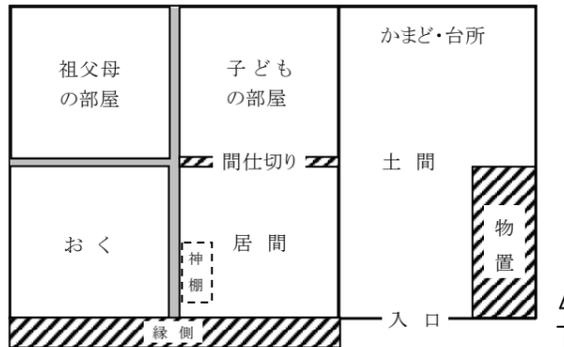
石井 廣志さん
(いしい ひろしさん・関谷)

龍寶寺の境内に移築されている古民家は、元は石井さんのご自宅だったとのことですが、私が高校を卒業した頃まで家族で暮らしていました。場所は島の神交差点近くの倉骨(くらぼね)で、1600年代(江戸時代の始め)の建築だと聞いています。昭和四十二・三年(1967・8)頃に今の家に立て替えることになり、その時すでに文化財の指定を受けていたため、川崎市にある日本民家園に移築される話もあったのですが、龍寶寺の先代の團野住職がぜひ市内で保存すべきだと話され、境内に移築することになりました。



「建物の思い出はどんなものですか？」
土台が無く、石の基礎の上に乗っけてあるだけで、大黒柱も無い建物でしたが、関東大震災にも倒れなかった強い家でした。かやぶき屋根なので夏は涼しくて住み心地は大変良かったのを覚えています。

移築の時に、建築当初の姿に戻すため、部屋の間仕切や縁側・物置などを取り払ってしまったため、住んでいた頃の面影が無くなって自分の家の感じがしませんが、屋根裏の梁(はり)だけは子どもの頃のイメージのままです。地元の山(じやま)の松の木を上手に組み合わせて、ものすごく太く見えたのが一番印象に残っています。



石井さんがお住まいだった頃の間取り (いろいろは無かった)



「先祖代々の建物の暮らしはどんなものでしたか？」
祖母、父母、叔父夫婦、3人の男兄弟と9人の大家族で暮らしていましたが、土間が広かったので、雨の日などは兄弟で運動会状態でした。(笑)

鎌倉駅前の連売所(鎌倉市農協連即売所)に野菜を卸していたため、年の暮れには連売所のための賃餅(ちんもち。駄賃をもらって餅をつくこと)の仕事があり、若い衆が土間で夜の8時から朝方まで餅をついていました。裸電球だったので暗かったのでしょうか、大釜で蒸籠(せいろう)6段も餅米を炊いたりして、それは賑やかでした。



今も変わらない屋根裏の梁(はり)

玉縄城築城500年祭は2012年秋に開催されます。みんなで参加しましょう！

歴史シリーズ 7 玉縄城主 北条氏勝

うじかつ

豊臣秀吉により2回目の関東・奥羽の諸大名に惣無事令が発せられて以降、秀吉は完全に北条氏を敵対者とみなす。小田原城主北条氏直は、秀吉の九州平定直後の次の目標は関東である旨を見ぬき、緊張の極に達する。天正十七年(1589)十月の名胡桃(なぐるみ)城奪取事件で合戦必至となり、総動員令がしかれる。

と共に山中城籠城戦のための準備と城普請にかかり、玉縄城留守役は堀内日向守勝光に託す。

翌天正十八年(1590)三月二十七日秀吉は沼津に着陣し、二十九日未明には豊臣秀次を大将とした中村一氏、山内一豊ら圧倒的に優勢な五万余騎で攻め上った。激戦の中で松田康長と間宮豊前ら主だった玉縄衆は一步も引かず討死。日も暮れて氏勝は、戦いの習いで一度や二度負けることは恥ではないが、城が落ちては面目が無い、このまま小田原に帰参するのは無念であると考え、間宮豊前の孫、彦次郎(十五歳、後に徳川家康より旗本に取り立てられる)を始め氏勝の弟新八郎直重、新蔵繁広ら一族郎党十八名全て髻(もとどり)を切り、箱根山中間道を通り小田原の久野にぬけ、玉縄城に帰城。城では山中城落城の報を耳にした直後、氏勝が帰還したことで喜びにつつまれたという。氏勝は玉縄領内の寺社に対し、兵糧米の徴発や、敵が見えたら加勢することを厳命し、玉縄城守備兵七百騎にて籠城戦を覚悟する。(以下次号に続く)

豊臣秀吉により2回目の関東・奥羽の諸大名に惣無事令が発せられて以降、秀吉は完全に北条氏を敵対者とみなす。小田原城主北条氏直は、秀吉の九州平定直後の次の目標は関東である旨を見ぬき、緊張の極に達する。天正十七年(1589)十月の名胡桃(なぐるみ)城奪取事件で合戦必至となり、総動員令がしかれる。天正十七年(1589)十一月二十四日、秀吉は北条氏直に対し宣戦布告を出し、諸大名に小田原(関東東北条領)への出陣命令を出す。北条方では秀吉軍の侵攻に対する策として箱根外輪山山麓の山中(やまなか、現三島市山中新田、標高500m程)に北条流築城術で新たに城を構え、城主には松田右衛門大夫康長を配置したが、松田氏は小勢なので大敵を防ぐのは難しく、小田原北条宗家の戦いの常に最前線にあった六代玉縄城主北条氏勝(ほうじょうじかつ)を添える。氏勝は与力侍の玉縄衆、間宮豊前、朝倉能登ら四千人の城兵